

1 学校教育目標
豊かなコミュニケーション力と確かな学力の向上を図り、様々な人と関わり合いながら自ら社会参加していく態度を育成する。

2 本年度の重点目標
●本年度の重点事項 (1) コミュニケーション力、社会性の育成 (2) 基礎学力の定着 (3) 働き方改革の推進 (4) 進路指導の充実 (5) 乳幼児教育相談の充実 (6) 理容科の魅力発信

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校 経営	・学校教育目標及び学校経営努力事項の周知と具現化	・「熊本聾学校のグランドデザイン2025」に掲げられた「具体的な取組」を実施できたか。	・全職員が「具体的な取組」を意識した上で、分掌部長や委員長等を中心に、全ての項目において達成に向けて実施することができる。	・特に分掌部長、委員長等は、業績評価の具体的目標を担当する取組に沿って記載するよう促し、面談において認識の共有化を図る。	B	・各分掌部・委員会等で「具体的な取組」を意識した取組を検討するようになり、今年度中に実践できた取組もあった。今後も達成に向けて、実施していく。
	・業務改善	・会議の効率化、ICT活用による校務の効率化を図ることができたか。	・会議では、活発に意見交換をし、設定した時間内に確実に終了することができる。 ・ICT活用アイデアを集約し、校務に活用することができる。	・事前の資料配付を確実にを行い、協議の時間を十分に確保できるようにする。 ・ICT支援員やICT活用者の知識を有する職員から活用アイデアを集約し、職員に紹介する。	B	・ほぼ全ての会議、研修等において、事前に資料を提示するようにしたこと、時間内に会議が終了するようになった。 ・ICT支援員からのアドバイスを基に施設予約や教材共有フォルダのアイデアを活用して作成したことで、校務の効率化を進めることができた。
	・働き方改革	・時間外勤務時間の削減に取り組むことができたか。	・時間外勤務時間の合計を前年度より10%減らすことができる。	・金曜のノー残業デーは、18時までには退勤する。 ・45時間以上の時間外勤務時間が3か月連続した職員に対して、疲労蓄積度チェックリストを実施する。改善が見られない場合は、管理職や産業医による面談を実施する。	C	・金曜日の18時までの退勤は、定着しつつある。 ・疲労蓄積度チェックリストの活用、校長面談を実施したが、前年度よりも時間外勤務時間の合計が微増した。校務の効率化及び職員の意識改革をより一層進める必要がある。

授業 の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の専門性の向上～教科指導の視点から～ 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校研究主題「自ら思考し、豊かに学ぶ授業づくり～幼児児童生徒の「なぜ」から始まる豊かな対話で深まる学びの展開を目指して～」につながる授業が実施できたか。 ・教科指導に関する職員の専門性を向上させることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校研究主題をもとに各学部でテーマを設定し、「自ら思考し、豊かに学ぶ授業づくり」に視点を置いた取組を行うことができる。 ・職員間で、年に1回以上授業を公開したり、年に3回以上自分の授業実践を振り返ったりすることで、自らの教科指導に関する専門性が向上したことを実感できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・月に1回学部研究会の機会を設け、学部テーマ及び課題の共通理解を図る。 ・学部テーマを意識した指導案を作成して、授業公開を行うよう、全職員に周知する。 ・ろう職員から幼児児童生徒の視点からの助言や、他教員からの評価や助言を得ることで、授業力の向上・改善につなげる。 ・全職員が「くまろう授業チェックリスト」(年3回)を行い、学習指導力の向上及び授業改善を図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「自ら思考し、豊かに学ぶ授業づくり」の視点で、各学部でテーマの設定や具体的な授業づくりについて、話し合いの機会を設けた。活発な意見交換が行われ、実態に応じた視覚教材、手話や指文字、音声や文字など、職員が伝え方を工夫しながら、学習内容の理解・定着に努める姿がより見られるようになった。 ・授業公開では、学部や同教科職員で授業参観後、幼児児童生徒の視点に立った具体的な助言により、新たな気付きを基に、授業改善につなげることができた。さらに、「くまろう授業チェックリスト」を各学期に1回実施し、振り返りを通して、専門性が向上したと実感した職員も多かった。
	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の専門性の向上～自立活動の視点から～ 	<ul style="list-style-type: none"> ・「くまろう自立活動段階表」を活用し、幼児・児童・生徒の実態に合った指導目標や指導内容を考え、実践することができたか。 ・「くまろう自立活動段階表」を活用しながら加筆修正を検討し、改善を図ることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「くまろう自立活動段階表」を活用した授業づくり(授業計画、授業の進め方、手立ての工夫など)を行い、自立活動の授業の充実を図るとともに、活用の有効性を実感できる。 ・「くまろう自立活動段階表」を積極的に活用しながら実践を振り返り、必要に応じて加筆修正して、より活用しやすい「くまろう自立活動段階表」を作成することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自立活動委員会において「くまろう自立活動段階表」の具体的な活用方法を検討する。 ・各学部の研究部員から、「くまろう自立活動段階表」の活用方法(指導目標の設定等)を説明し、各学部における積極的な活用を図る。 ・幼児・児童・生徒の実態、発達段階に応じた、各学部で重点的に取り組むべき段階表の箇所(目安)を学部職員で話し合い、改善を図る機会を年に1回設定する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「くまろう自立活動段階表」の具体的な活用法について、全職員に周知した。主に、指導目標の設定等において、活用するようになった。 ・各学部で「くまろう自立活動段階表」を活用した後、改めて内容を確認する機会を設けたところ、加筆修正の意見が上がった。加筆修正し、次年度に向けてより活用しやすい段階表の作成を行う。

<p>キャリア教育 (進路指導)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学部間のキャリア教育の連携 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部卒業時に身につける力が具体的、系統的に整理されているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア教育を通じて育成する基礎的・汎用的能力（4つの能力）を学部毎に整理し、系統性を意識した取組を行うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「身につけるべき力」について各学部職員にアンケートを実施する。 	<p style="text-align: center;">B</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高等部用は「職業準備性ピラミッド」の分類（5段階）に沿って再構成し小・中学部段階用を新たに案として作成した。 ・各学部からアンケートで意見を集約し、系統的な取組ができてきているか、見直すことができた。
<p>生徒 (生活)指導</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・校則やルール、マナー等の遵守と安全教育の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・交通安全、スマホの適切な使用等に関する生活上の課題に対し、幼児・児童・生徒の実態に合った取組ができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外部機関等と連携し、各学部で幼児・児童・生徒の実態に応じた交通安全教室、スマホ安全教室を各学部で年に1回以上実施し、幼児児童生徒の安全への意識を高めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・交通安全に関しては、幼児児童生徒の実態を説明した上で、課題解決に向けた講話や実演を警察署に依頼して実施する。 ・携帯キャリアの出前授業を活用する等、外部機関の講師から説明する機会を年に1回以上設ける。 	<p style="text-align: center;">B</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前打ち合わせで幼児児童生徒の実態を警察署員に説明した上で、交通安全に関する講話や実演をいただいたことで、幼児児童生徒の交通安全への意識を高めることができた。 ・スマホの適切な使用に関して、教師による授業を年に1回、長期休暇前の指導を学期毎に行ったことで、スマホの安全な使用に関する意識を高めることができた。 ・幼児児童生徒が、交通安全やスマホの適切な使用に関する意識を継続してもてるよう、定期的な指導を行っていきたい。
<p>人権教育の推進</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他者との違いに気づき、認め合いながら尊重する力を育むための学びの充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児・児童・生徒の自尊感情を高め、自他の命や他者の思いを大切にすることを育むことができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児・児童・生徒が自尊感情を高め、日々の生活の中で自他を認め合い、命を大切にすることを育む言動が、授業後も様々な生活の場においてできるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・6月と12月を人権教育推進月間とし、自他の命や他者の思いを大切にする心を育む特設の授業を行うよう計画を立て、全職員に周知する。 ・全教科全領域における人権教育の視点に立った目標、取組を掲載した人権教育全体計画を基に、授業を実践するように、全職員に周知する。 	<p style="text-align: center;">B</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童会や生徒会活動にて尊重した名前の呼び方を考えたり、各学級では良いところに目をむけ合ったりする活動を通して、互いを認め、ほめ、励まし合うことについて考える等の取組を行うことができた。日頃から職員自身も児童生徒の人権意識を高める言葉かけや関わりの推進に努めている。 ・気持ちや考えを伝え合う際に、相手の感じ方、気持ちも配慮した自分の気持ちや想いを伝えることの大切さや手話での表現の仕方について、対話しながら考える

						<p>取組を今後も継続して、生活の場への般化に繋げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 心のきずな月間を中心としていじめ等の防止を含め、担任が児童生徒と話す機会を設けたり、命の大切さについて考える機会を設けたことで、日頃の生活で意識して関わる様子が見られるようになってきた。
いじめの防止等	<ul style="list-style-type: none"> いじめ防止等対策委員会を核としたいじめの早期発見と未然防止 	<ul style="list-style-type: none"> いじめの早期発見につながる取組が実践できたか。 いじめにつながる事象を早期発見した場合に、迅速に組織的に対応することができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 定期的なアンケートを年に4回実施し、いじめの早期発見に努めることができる。 いじめの気づきまたは幼児児童生徒からの訴えがあった場合、早急に情報を集約して共有を図り、いじめ防止等対策委員会で対応できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 学期毎（1学期は2回）に、心のアンケートを実施する。 スクールカウンセラーや心の110番、スクールサインなど相談できる場所を児童生徒保護者に周知する。 情報集約がしやすい「聞き取りシート」を作成する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 年に4回アンケートを実施し、児童生徒からの訴えに担任等がすぐに聞き取りを行った。 聞き取りの際は、「聞き取りシート」を作成し、確実な情報収集に努めた。 集約した情報を基に、生徒指導部や関係学部職員、学部主事や管理職で迅速に情報を共有し、児童生徒の訴えに対応した。 いじめ防止等対策委員会において、対応前後の情報の整理、分析及び効果的な対策の検討を行うことができた。
地域支援	<ul style="list-style-type: none"> 教育相談、乳幼児教育相談、地域支援の充実 	<ul style="list-style-type: none"> 教育相談を受けられた方が安心して、次の取組への目標設定や、活動への意欲が見られたか。 本校教育活動に対して、理解することができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 県内全域で相談者のニーズに応じた教育相談や地域支援を行い、相談者が安心感や希望感を得られるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> センター部を中心に多くの職員と協力し、乳幼児教育相談や小中高校生への教育相談に対応できるようにする。 相談のみではなく相談者のニーズに応じた交流活動や授業参観等の充実を図るとともに、サテライトでの相談支援活動も計画的に実施する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 相談者の希望に応じて、授業見学や体験交流が実施できたことで、相談者が安心して帰っていく様子が見られた。 乳幼児教育相談におけるサテライトも数回実施し、来校が難しい保護者と子供の支援を行うこともできた。実施後に保護者から、再度相談したり、本校の学習会に参加したりしたいという要望が上がることも多かった。

<p>地域連携 (コミュニティスクールなど)</p>	<p>・福祉こども避難所運営計画の改善</p>	<p>・避難所運営のマニュアルを改善することができたか。</p>	<p>・福祉こども避難所になった際の役割分担及び活動内容を再検討する等、福祉こども避難所マニュアルを見直し、マニュアルの精度を高める。</p>	<p>・福祉こども避難所に関する熊本市の担当職員とマニュアルを確認し、具体的な流れや役割分担等を協議する機会を年に1回以上設定する。</p>	<p>B</p>	<p>・他校で行われた開設訓練でノウハウを学んだり、本校の福祉こども避難所担当職員と校内を巡視し、役割分担及び活動内容を確認したりした。開設の流れや役割分担等をより明確にすることができた。</p>
--------------------------------	-------------------------	----------------------------------	---	--	----------	--

4 学校関係者評価

<p>(1) 学校評価アンケート(保護者)結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度は、「よく当てはまる」を4、「全く当てはまらない」を1とする4段階評価に加え、「分からない」を0で回答するアンケートを実施した。「学校は、「いじめ」に対して未然防止や早期発見に努めている。」「児童生徒会活動・生徒会活動が、適切に行われている。」「学校は働き方改革が進められ、教職員はやりがいを感じながら効率的に働いている。」の3項目において「分からない」の回答が顕著に多かった。 ・その他の項目においては、昨年度と比較して評価の差が大きい項目はなかった。 ・全ての項目において、概ね評価は高かったものの、ほぼ全ての項目において、少数ではあるが低い評価の回答もあった。 <p>(2) 学校関係者評価委員会の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の小中学校等から転入した児童生徒へのコミュニケーションのフォロー体制、及び本校から小中高等学校へ転出する児童生徒へのフォロー体制が必要である。 ・聴覚障がいと知的障がいを併せ有する児童生徒の支援について、今まで以上に情報交換、情報共有を行っていただきたい。 ・言語聴覚士の配置があり、今後は関係機関との連携や活用が進んでいくと期待している。併せて、手話通訳士の配置があることを願っている。 ・手話力の向上のために、専門家、専門機関を活用しながら取り組んでほしい。 ・「すぐーる」を活用した迅速な情報提供を今後も継続して行ってほしい。

5 総合評価

<p>(1) コミュニケーション力、社会性の育成</p> <p>幼児児童生徒の共通のコミュニケーション手段は手話であることを共通理解しつつ、個々の幼児児童生徒に応じたコミュニケーション手段を獲得できるよう、模索しながら取り組むことができた。</p> <p>(2) 基礎学力の定着</p> <p>児童生徒の実態が多様であるため、職員が実態に応じた視覚教材、伝え方の工夫等をしながら授業に臨んでいる。指導体制においても、集団指導の中で、機を捉えて個別に指導する場面を設ける等、指導体制も工夫した。少しずつではあるが、児童生徒の基礎学力が身に付いてきていると感じている。</p> <p>(3) 働き方改革の推進</p> <p>前年度から継続して疲労蓄積度チェックリストを活用したり、校長面談を実施したりしたが、時間外勤務時間の縮減に関する効果はあまり見られなかった。</p> <p>(4) 進路指導の充実</p> <p>卒業後の生活を見越して、高等部卒業までに身につけておくべき基礎的・汎用的能力について各学部職員にアンケートをとり、高等部用を再構成したり、小中学部用の案を作成したりすることができた。職場体験、現場実習等も計画的に実施することができた。</p> <p>(5) 乳幼児教育相談の充実</p> <p>関係機関の職員と連携しながら、本校での乳幼児教育相談に加えてサテライトも数回実施することができた。また、乳幼児の保護者を対象に学習会を実施したことで、乳幼児教育相談を受けた保護者が意欲的に学習会に参加し、不安を軽減させ、安心した表情で帰って行く様子や再度来校される姿を見ることができた。</p> <p>(6) 理容科の魅力発信</p> <p>新たな発信はできなかったが、ホームページにおける発信、PTA総会でのPRにおいては、今年度も継続して行うことができた。今年度は、他県の理容科生徒と3年ぶりに技術交流会を通して交流し、理容技術を磨き合い、刺激を受けている。このような取組も併せて、魅力を発信していきたい。</p>

6 次年度への課題・改善方策

(1) 働き方改革のより一層の推進

毎週金曜日の定時退勤日は、18時までの退勤が定着しつつある。早く退勤できる時は退勤するという意識が高まるよう、取組を工夫したい。また、ICT活用や会議の効率化・スリム化を図り、校務の効率化をより一層進めたい。

(2) 転入児童生徒のコミュニケーションにおけるフォロー体制の構築

今年度転入してきた児童生徒は、自立活動等の授業場面（発表場面）時の指導に加え、普段の学校生活、寄宿舎生活等における児童生徒同士の自然なかかわり合い等を通して、少しずつ手話を獲得してきている。ろうの職員や専門家の助言を仰ぎながら、個に応じたフォロー体制の構築に努めたい。

(3) 関係機関とのつながりの拡大

言語聴覚士の資格を有する職員が配置されたことで、保健師等と連携した様々な取組の展開が期待できる。職員の手話力の向上等に向けては、手話に関する専門家との連携が必要不可欠となる。福祉子ども避難所の開設訓練、運営計画については、熊本市の関係課との地域連携がより一層求められる。様々な関係機関とのつながりを拡大していくことを次年度は意識していきたい。

(4) 職員の専門性の向上

職員は、教科指導、自立活動の視点から、取組を工夫しながら専門性の向上・授業の充実に努めてきた。しかし、学校評価アンケートでは、「学校は、子どもの障害について理解し、適切な指導・支援をしている」項目において、自己評価が低かった。次年度は、外部講師を招聘して研修を受けたり、研究授業を通して改善点の助言をいただいたりする機会を積極的に設定することで、授業を改善するとともに、自身の専門性の向上が実感できるように取り組みたい。

(5) 各学部・各分掌部等の取組の確実な周知

特に、今回の学校評価アンケートで「分からない」という回答が多かった「いじめ」「児童会・生徒会活動」については、取組が保護者に理解していただけるよう、ホームページやすぐーる等を活用し、積極的な周知に努めたい。